

九月二一日(月)

明日の天気予報でもと、テレビを点けて適当にチャンネルを合わせる。食卓の上には、立派な国際郵便が置いてあった。表には、久々に見る健人の日本語で、こここの住所と宛名が書いてある。

去年の終わりに転居して住所が変わったとメールしたら返事が来なかったけど、なんだかんだで見えていたらしい。メールも筆不精な息子の顔を思い浮かべながら、味わい深い彼の字をじっくり眺める。

残念なことに、私宛のメッセージや荷物はなく、先日送った沙綾のメッセージに対する元夫からの返事と、彼女宛っぽい小さなプレゼントが入っていた。自分で宛名を書いて、直接娘に送れば良いのに、日本語が書ける息子の手を借りて別れた妻に送ってくるなんて、なんて性格の悪いこと。

「ねえ、ケビン？」

私の足元でのんびりとテレビを見ている愛犬の頭を撫でてやる。彼は私の顔を見上げ、ペロリと舐めてくれた。

天気予報を見るつもりで付けていたテレビは、「あれから二二年」と特集を始める。そう言えば今日は、〇二だった。当時は一歳になる直前の沙綾とカリフォルニアで生活していたつけ。結局アレから健人が三歳になるまで向こうで暮らして、こっちに帰って来たんだった。

その健人とも、離れて暮らすようになってもう何年？ 確か、〇二の年末だったからえーつと――

スマホの通知に、現実に戻される。画面に出た通知は、沙綾からの「もう着くよ」のメッセージ。アプリを開いて、「了解」と返した。適当なスタンプも送っておく。アプリを閉じる前に、既読がついた。

結局、沙綾はどれだけ長居するのだろうか？ 晩ご飯を食べていくのか行かないのか、その返事はまだもらっていない。彼女がいらなかったとしても、私の食事がいつになるのか分からない。パパッと食べられるように、とろ火で温めてしまおうか。

ケビンにそのまま待っているように指示して、冷蔵庫から昨日作ったカレーの

入った鍋を取り出した。そのままコンロに乗せて、一番小さい火にして温める。換気扇の音で、テレビが何を言っているか全く分からない。CMが終わると、ようやく天気予報らしい。

キッチンから出て、引いたままの椅子に腰を下ろす。天気予報が始まったかと思えば、インターホンが鳴った。画面には沙綾の姿が写っている。テレビの音を少し大きくして、「開いてるから、どうぞ」と応えた。

再びまだ暖かい椅子に腰を下ろし、明日の降水確率に耳を傾ける。とりあえず、傘はいらないらしい。週間予報に切り替わるタイミングで、沙綾がリビングまで上がって来た。

「へー。今日はカレーなんだ」

沙綾はケビンを乱暴に撫で回しながら、キッチンから漂ってくる匂いに鼻を傾ける。

「食べていく？」

「お母さんのカレーを食べたいのは山々だけど、一輝が待ってるからなく」

「あら、そう？ こんな時間に呼び出して悪かったわね」

彼女は「全然大丈夫。気にしないで」と食卓に腰掛けた。卓上の封筒を指して、「コレ？」と訊く。私が頷くと、彼女は中身を確かめ始めた。

「それで、お茶にする？ コーヒーにする？」

私がコーヒーメーカーの前で訊くと、彼女は「おかまいなく。すぐに帰るし」とそっけなく答えた。

初出 令和三年一〇月一三日 Pixivにて公開